

2024年4月21日復活節第4主日説教

エゼキエル所34章1-10節

使徒言行録4章32-37節

ヨハネによる福音書10章11-16節

本日の旧約聖書は、エゼキエル書です。エゼキエルという預言者は、バビロン捕囚の直前から、捕囚中にかけて活動したといわれています。それゆえエゼキエル書の内容、ことに後半部分は、バビロン捕囚の中からイスラエルの回復、新しいエルサレム神殿の回復についての預言があります。エゼキエル書は、批判的な預言の言葉と、回復に向けた慰めの言葉の両方があるのが特徴です。

本日の個所は、イスラエルの牧者たち、すなわち指導者たちに対する批判の部分です。回復の前に、バビロン捕囚を招いた指導者たちへの批判が書かれているのです。その批判の中で「**人の子よ、イスラエルの牧者に預言せよ。預言して、彼ら、牧者に言いなさい**」(エゼ34:2)とありますが、イスラエルの指導者たちを「牧者」にたとえて批判しています。「牧者」とは、羊、山羊などの世話をする人です。指導者をそのようにたとえているのは、そもそも、主なる神様がイスラエルの牧者であるからです。そのため、本日の聖書の日課の後には、「**実に、主なる神はこう言われる。私が自ら自分の群れを尋ね求め、彼らを捜し出す**」(エゼ34:11)と続き、主なる神自身が、牧者としてイスラエルの世話をすると宣言されます。また本日の詩編では、「**主こそ神であると知れ、神はわたしたちを造られた、わたしたちは神のもの、その民、その牧場の羊**」(詩編100:2)とありますが、本日の詩編にはもう一つ選択肢があり、そこには「**主は私の羊飼、あるいは牧者**」(詩編23:1)という表現があります。

これらのことから、イスラエルの指導者にとって大切なことが、牧者である主なる神様の代理として、その職務にあることを自覚することです。自分の利益のためではなく、主なる神様が、牧者であることを示すことが大切なのです。この点が、イスラエルの王と指導者たちが、他の王国の王や指導者とは違う点です。しかし、現実には、彼らは自分の利益のために働き、王国の崩壊を招きました。エゼキエルは、そのことを厳しく批判しているのです。それは、政策の失敗に対する批判であるとか、状況判断の誤りに対する批判であるとか、そのような事柄ではありません。根本から自分たちの存在を勘違いしたことへの批判です。それは、本日の聖書日課の最後の個所、「**主なる神はこう言われる。私は牧者に立ち向かう。私は彼らの手から私の羊の群れを尋ね求め、彼らに群れを養わせない。牧者は二度とわが身を養えなくなる。私は彼らの口から私の群れを救い出す。私の群れが彼らの餌食となることはない**」(エゼ34:10)という表現に強く表れています。

さて、本日の福音書は、ヨハネによる福音書ですが、本日の個所の冒頭に、「**私は良い羊飼である。良い羊飼いは羊のために命を捨てる**」(ヨハネ10:11)とあります。ヨハネによる福音書には、様々な特徴がありますが、その一つに、本文は簡潔で明快であるが、その意味が分かりにくいということがあります。こ

の個所が表層の意味として伝えていることは、「わたし」であるイエス様が、「よい羊飼いだ」とあり、「よい」ということは、「羊のために命を捨てる」ことで示されるということです。最初に疑問に持つことは、イエス様は大工だったのではということですが、「羊飼いだ」とあることは、たとえなのだろうとわかります。ただし、自分を「羊飼いだ」とたとえとは書かれていません。翻訳では示しにくいのですが、「わたしこそが、羊のために命をすてるような、よい羊飼いだ」と強く断言しているのです。しかし、「私は良い羊飼いだである。私は自分の羊を知っており、羊も私を知っている。それは、父が私を知っておられ、私が父を知っているのと同じである。私は羊のために命を捨てる。」(ヨハネ 10:14-15) と羊と羊飼いと関係、また羊飼いとその父の関係についての言及はありますが、なぜ羊飼いだ、なぜ自分の命を捨てるのか、その理由について明記されていないのです。なぜ、明記していないのか、それは、イエス様が「良い羊飼いだ」とあることも、「羊のために命を捨てる」ことも、知識や教養などではなく、信仰にかかわる事柄であるからです。すなわち、『聖書』を通して、主なる神様に対するしっかりとした信仰を持ち、イエス様を通してその信仰を深めたとき、悟る事柄であるからです。

「私は良い羊飼いだである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」、この短い表現の表層の意味だけを受け止めようとするならば、それ以上の内容はありません。しかし、イエス様の復活を信じる時、この文言により深い意味があることがわかります。すなわち、主なる神様がイスラエルとイスラエルを超えたすべての被造物に対する羊飼いだであること、しかし、自分の命を捨てるほど、彼らを愛している羊飼いだであること、それはイスラエルの歴史を通して、すなわち『聖書(旧約)』を通して何度も示されていたこと。しかし、今や、イエス様を通して、ことにその十字架の死を通して、もっともその愛が深くそして明確に示されたこと。またその主なる神様の愛を示す出来事が、時間も空間も超えた真理であることが、復活を通して証明されたこと、イエス様の復活を信じる時、「私は良い羊飼いだである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」という短い表現に、これだけの内容があることがわかるのです。

この内容からわたしたちに示されることは、主なる神様の愛に基づいた交わりを形成することの大切さです。それを担うのが教会です。そのことについて本日の福音書は明記していません。しかし、使徒書の代わりに読んでいる本日の使徒言行録にその一例があります。使徒言行録は、直接、ヨハネによる福音書と何らかの文書依存関係はなく、また最初の教会の歴史をかなり整理した理想化しているといえるのですが、「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた」(使徒 4:32) という表現には、イエスの復活を信じる人々が、すなわち、イエス様が羊のために命を捨てるほどの羊飼いだであることを悟って愛を知った人々が、どのような交わりを形成して、その愛を示したかを表しています。わたしたちもこの愛を示す使命を負っています。与えられた賜物を通して、その使命を担っていきたいと思います。主なる神様の愛から離れた出来事が多いからこそ、わたしたちは、教会を通して愛を示していきたいと思います。